深代惇郎著「深代惇郎の天声人語」朝日文庫、朝日新聞出版 2015 年 9 月 30 日刊を読む（Ｉ）

親となる

１．「私は受験をひかえている花の中学 3 年生です」という少女からお手紙をもらった。トマトの絵入りの可愛い便せんに「天声人語と社説を、どうか夏休みの間お休みにして下さいませんか」と、誤字のない筆で書いてあった。

２．この「花の中学 3 年生」は夏休みの宿題に、毎日、「天声人語」と「社説」の要約、感想、字句解釈をやらねばならない。ところが、いくら読んでも何が書いてあるのか分からない日がある。1 日に 2 時間以上もかかるときがある。「どうかお休みにして下さい」という切々たる訴えが、コラム子を悩ませる。

３．夏休みの最後を思う存分、海や山で遊びたいのだろう。それを毎日、辞書と首っ引きでこのコラムと向かい合っている姿を想像すると、何だか申し訳ない気持ちにもなる。と同時に、彼女が「分からない」のはなぜだろうと考える。分からない言葉に出会ったら、辞書を引けばよいはずなのに。

４．おそらく彼女が 2 時間も取り組んで分からないときがあるのは、漢字や熟語の難しさのためばかりではあるまい。文中で論理が飛躍したところ、発想が転換したところ、問題が急に抽象化されたところでつまずくのではあるまいか。こちらの表現や問題の整理の仕方に上手、下手があるのかも知れぬが、読む方の知識や読解力の問題もあるにちがいない。たとえばパレスチナ・ゲリラにしても、インフレにしても、言葉をやさしく、やさしくして、「眉（まゆ）」を「目の上に生えた毛」というたぐいに言いかえても、分からないことに変わりはない。

５．それに日本語は複雑で、微妙で、難解なところがある。劇作家宇野信夫氏が「親になる」と「親となる」という言葉の違いを書いた文を、読んだことがある。子を産めば「親になる」から犬ネコでも出来ることだが、親といわれるような「親となる」のは難しい。「に」と「と」で意味ががらりと違ってくる。

６．こうしたことは、多分、辞書を引いても見つかるまい。文意を正確に読むことも難しいが、文を味わうこともまた難しい。（1974 年 8 月 24 日）

P247 ～ 248

［コメント］

朝日新聞の名コラムニスト 深代惇郎さんからの、社説やコラム、新聞記事などを勉強のためにスクラップ、切り抜いている全国の小学生、中学生、高校生に宛てたメッセージ。深代さんは天声人語を書き続けながら、この文章を書いた翌年に 46 歳の若さで死去。「天声人語といえば深代惇郎」と言われるくらい親しまれた本書の刊行を、天声人語の読者の皆様とともに喜びたい。中学生、高校生、大学生の皆様も是非、御一読を。

― 2015 年 11 月 22 日　林　明夫記―